

杜牧の邊塞を詠じる詩について

—その作品集の編纂、及び「河湟」の詠法を手がかりに—

高橋 未來

一、はじめに

中唐から晩唐にかけて活躍した杜牧（八〇三〜八五二）、字は牧之は、いわゆる「邊塞詩人」ではない。それは、杜牧が量的にさほど多くの「邊塞詩」を残さなかった、という事實に起因するばかりではない。王翰や王之涣のように、邊塞詩を僅かしか今日に傳えていない詩人がむしろ「邊塞詩人」と認識されている事實を想起すれば、このことは理解しやすいだろう。つまり杜牧の「邊塞詩」は、中國邊塞詩史という観点から見た場合、その存在意義を讀者に訴えかけるような、突出したインパクトと輝きとを持っていないかに映る。その意味において、杜牧は確かに「邊塞詩人」とは言い難い。

しかし、ひとたび見方を變えて、「邊塞」という主題もしくは素材が杜牧にとっていかなる意味を持つのか、と問い直す時、そこには全く別の價值が立ち現われてくる。

周知の通り杜牧は、「風流才子」たる華やかなエピソードを残すその一方で、經世濟民の理念を強く抱き、政治問題に關して多く發言し

た詩人として知られている。中でも『孫子』の注釋や、名高い論策「罪言」などに見える様に、杜牧が軍略家としての自己に大きな自負を抱いていたことは、これまでもしばしば論じられてきた。更に杜牧の生きた中晩唐の時代には、國內では藩鎮の叛亂か、國外では異民族の侵略か、國家を脅かす大問題となっていた。従って杜牧は、その軍略家の能力を發揮する機會としても、「邊塞」に對して大いに關心を抱いていたわけである。

私見では、杜牧における「邊塞」とは、詩人としての杜牧の個性や志向を最も鮮明に映し出す、鍵のごとき重要な主題もしくは素材の一つである。

そこで本稿では、この新たな観点から杜牧の「邊塞」を詠する作品に分析を加え、杜牧の詩歌觀ないしは詩人としての個性について論じてみたい。

なお、杜牧作品のテキストとして『樊川文集』（陳允吉點校、上海古籍出版社、一九七八年九月）を使用し、清・馮集梧注『樊川詩集注』（上海古籍出版社、一九七八年五月）も適宜参照する。

二、杜牧の邊塞詩における傾向

(1) 樂府系邊塞詩

前述のように、杜牧は異民族の侵略に對して強く關心を抱いていたか、その生涯を通して從軍や國境附近の幕府勤務、または彼の地への旅行という經驗それ自體は無かった。従つて杜牧には、その實體驗、或いは自らの目で見た邊塞を描く詩は、もとより無い。とすれば、杜牧が邊塞を描く方途としては、既成のモデル、すなわち漢魏六朝以來の傳統的手法を用いた邊塞詩をまずモデルとして描く事にならう。

そこで杜牧詩文の作品集『樊川文集』二十卷、『樊川外集』一卷(以下『外集』と略稱す)及び『樊川別集』一卷(以下『別集』と略稱す)を見てみると、注目すべきことに、そのような傳統的手法による邊塞詩は存在するものの、そこには邊塞詩ジャンルの中核をなす「從軍行」や「塞上曲」といった新舊の樂府題か、一首も收められていない事に氣づくのである。

但し杜牧には、そもそも樂府自體が少なく、『樊川文集』、『外集』、『別集』全四五七首のうち、樂府は三首を數えるに止まる。中晚唐期の邊塞詩群においても樂府の邊塞詩が主流をなす中において、杜牧のこの狀況は特異にも感しられよう。ならば杜牧と同時代の他詩人における、樂府、及び樂府系邊塞詩の制作狀況はどのようなものなのだろうか。

例えば杜牧と親しく交流を持った①張祜(七九二〜八五三頃)は、北宋・郭茂倩撰『樂府詩集』に樂府三十六首を收め、そのうち「入關」他六首の邊塞詩を含んでいる。②李商隱(八一三〜八五八)の樂府は、『樂府詩集』に九首を收め、そのうち「王昭君」一首が邊塞と關連す

杜牧の邊塞を詠する詩について

る樂府題である。③許渾(七八八〜八五四頃)には、詩話の類にて高く評される「塞上曲」か有るものの、樂府はこの邊塞詩一首のみである。杜牧と許渾とは詩風の似ている詩人であるだけに、樂府作品の寡なさは杜牧と結果的に妙通しており、興味深い。

總して、樂府の制作と、その中でも邊塞を主題とする樂府の制作とは、詩人の關心の所在やその個性に基づくことが確認されよう。

翻つて杜牧の樂府は三首。『樂府詩集』卷五十八琴曲歌辭所收の「別鶴」(『樊川別集』所收「別鶴」と、同書卷六十六雜曲歌辭所收の「少年行」(『樊川文集』卷二。以下卷數のみ記す)、同じく「少年行」(卷四)である。

そのうち五言排律「少年行」(卷四)には、遊俠の若者か邊塞へ出征する場面がある。王維、王昌齡等の作例にもあるように、元々「少年行」には邊塞の存在が多く見られる。但し杜牧の詩についていえば、表現の中心は若者の遊俠ふりにあり、邊塞はその象徴として詠み込まれるに止まっている。従つて杜牧は、中晚唐の詩人の中で較べてみて、とりわけて樂府自體と、邊塞を主題とする樂府とを積極的の制作しなかったと見てよいだろう。

(2) 樂府以外の邊塞詩

次いで、杜牧作品中、同じく傳統的手法に則した、樂府以外の邊塞詩を内容別に示してみたい。そこからは、興味深い幾つかの傾向が浮かひ上がってくるのである。

《邊塞を主題とする詩》

「河湟」(卷二)

《邊塞の幕府に赴任する人へ贈る詩》

「夏州崔常侍自少常亞列出領鷹千韻」(卷二) 五言排律

「黨項との戦鬪にて戦死した人物を悼む詩」

「開慶州趙縱使君與黨項戰中箭身死長句」(卷二) 七言律詩

《國境警備へ向かう兵士の心情を詠う詩》

「并州道中」(別集) 五言律詩

「偶題」二首(外集) 五言律詩

《邊塞にいる旅人の望郷を詠う詩》

「邊上聞胡笳」三首(別集) 七言絕句

「邊上晚秋」(別集) 七言絕句

《西域に縁ある古の人物の姿を詠う詩》

「題木蘭廟」(卷四) 七言絕句

「青塚」(別集) 七言絕句

《邊塞へ出征する夫を想う闕怨詩》

「闕情代作」(外集) 七言律詩

「代人作」(外集) 五言排律

「秋夢」(別集) 五言律詩

この杜牧の非樂府系邊塞詩からは、次の三點か特色として窺える。
 ①、内容上、邊塞詩の主たるテーマというへき從軍に關する詩は、二首のみである。かつ、右に擧げた詩は總じて内容、詩風ともに極やかなものといつてよく、邊塞での戦鬪は描かれていない。すなわち杜牧作品集には、例えば李白「戰城南」のような邊塞での戦鬪を描く詩は、一首も残されていないのである。

②、《邊塞へ出征する夫を思う闕怨詩》三首か「外集」、**「別集」**の詩であることに着目したい。というのは、「**樊川文集**」所收の闕怨詩全九首において、闕中の女性か思いを馳せる夫または戀人の行く先は、艱難辛苦の暗いイメージか伴う遠征ではないのである。女性の思慕する對象は、瀟酒・多情な若者である事が多い。

③、最も注目すべき傾向として、右に擧げた邊塞詩、特に狹義の邊塞詩は、「**外集**」及び「**別集**」に偏在しており、「**樊川文集**」には殆ど收められていないことか認められる。

①の特色からは、その理由として、杜牧は戦争の慘狀を生々しく表現することを志向せず、また反戰派ならぬ主戰派的な姿勢を持っていた事か考えられる。杜牧の詩風は、南宋・陳振孫撰「直齋書錄解題」卷十六に「牧才高俊邁不羈、其詩豪而麗、有氣概、非晚唐人所能及也」(牧才は高くして俊邁不羈、其の詩は豪にして麗、氣概有り、晚唐の人の能く及ぶ所に非ざるなり)と表されるように、豪放さと麗麗さという、相反する二面を持つものである。いわは、その「**豪**」の部分がよく表れた結果と位置つけられるたろう。

また②の特色からは、瀟酒な詩風か讀み取れよう。いわは杜牧作品の「**麗**」の部分か現れた結果と位置つけられる。

③の特色については、更なる説明を要する。以下に、「**樊川文集**」と「**外集**」、「**別集**」という三集の編纂経緯に即して、その意味するところを明らかにしてゆきたい。

三、杜牧作品集の編纂経緯について

杜牧の甥の裴延翰か記す『**樊川文集**」序に據ると、杜牧は死去するおよそ一年前に、祖父の杜佑か樊川に建てた別莊を修築し、そこで親

しい者たちと遊んだという。そのある宴たけなわの席にて、杜牧は裴延翰に次のように告げた。

司馬遷云、自古富貴、其名磨滅者、不可勝紀。我適雅走於此、得官受俸、再治完具、俄及老爲樊上翁。既不自期富貴、要有數百首文章、異日爾爲我序、號樊川集、如此爾樊川一禽魚、一草木無恨矣、庶千百年未隨此磨滅邪。

(司馬遷云う、「古より富貴にして、其の名の磨滅する者、勝けて紀すべからず」と。我は適たま稚きより此に走り、官を得て俸を受け、再び治めて完具するに、俄に老いて樊上の翁と爲るに及ぶ。既に自ら富貴たるを期せざるも、數百首の文章を有たんとを要むれば、異日爾は我が爲に序して、『樊川集』と號せよ、此くの如く樊川の一禽魚、一草木を顧みれば恨み無からん、庶わくは千百年にして未だ此に隨いて磨滅せざらんことをや」と。)

引用された司馬遷の言は、任安に宛てた書簡(『文選』卷四十一「報任少卿書」)にて、宮刑の屈辱を受けた後にもなお生きる據り所として「史記」執筆の動機を語った、名高い一節である。

司馬遷かこれに續けて孔子や屈原等の著作の契機を「此人皆意有鬱結、不得通其道、故述往事、思來者」(此の人皆な意に鬱結する有るも、其の道を通するを得ず、故に往事を述へ、來者を思う)と記す、いわゆる「發憤著書」の思想は、以後賑々と引き繼がれてゆく傳統的士大夫觀である。それは杜牧においても、平生より抱き續けた士大夫觀であり、文學觀であつた。

この時杜牧は、幼少の記憶を想起させる場所て人生を振り返り、その締め括りとなる詩文集に思いを致す。そして自作の詩文の編纂を裴

杜牧の邊塞を詠する詩について

延翰に頼んだという。杜牧は古の賢者と同様に、詩文か自身の生きた意義を代辨するものと意識し、それを後世に伝えることを強く願つていた事か判る。

但し、續く裴延翰の序には「明年冬、始少得恙、盡搜文章、閱千百紙、擲焚之、續編留者十二三」(明年の冬、始めて少しく恙を得て、盡く文章を搜し、千百紙を閱するも、擲てて之を焚き、續かに留むるに屬する者は十二、三のみ)とある。杜牧は後に病を得てから、裴延翰に任せる前に自ら詩文を點檢し、その二三割を残すのみで、あとの詩文は擲却したのであつた。自分の詩文が後世に傳わることを意識した杜牧は、それ故に、遺すへき詩文の選定をしたのであろう。

そこで、幼少より杜牧に詩文の手ほときを受けていた裴延翰は、手元に留めてあつた杜牧の詩文を補い、杜牧の死去から四年後(大中十年(八五六))に「樊川文集」として編纂し終えたのであつた。

それに次ぐ「外集」の編纂経緯に關しては、未詳の點が多い。明の胡震亨撰「唐音戊籤」卷一に「其外集詩唐人所編、更其焚棄之餘」(其れ外集の詩は唐人の編む所なり、其の焚棄を更るの餘り)と記すのに據れば、「樊川文集」に漏れた作品を後に唐代の人か收集して「外集」を編んだということになる。

次の「別集」には、杜陵の田園なる人物か記す北宋・熙寧六年(一〇七三)の序があり、そこに「舊傳集外詩者又九十五首、家家有之。予往年於某郊魏處士野家得牧詩九首、近改上盧訥處又得五十篇、皆二集所逸者。其「後池泛舟宴送王十秀才」詩、乃知外集所亡、取別句以補題」(舊く傳うる集外の詩は又た九十五首、家家に之有り。予は往年某郊の魏處士野の家に於いて牧の詩九首を得、近ころ改上の盧訥の處に又た五十篇を得たり、皆な二集の逸せし所の者なり。其れ「後池

泛舟宴送王十秀才」詩は、乃ち外集の「亡^{うしな}いし所にして、別句を取りて以て題を補うを知る」と記されている。この記述に據れば「別集」とは、「樊川文集」と「外集」から漏れ、世に傳わっていた詩を収集したものであることになる。

以上から明らかなように、「樊川文集」所收の詩とは、杜牧か後世に知友を求めんとする想いのもとに遺した作品と、裴延翰か補った作品とから成るものである。従つて、他方の「外集」・「別集」二集に偏在する邊塞詩とは、杜牧のオリシナルであるか否かに拘らず、杜牧か自作として後世に遺すことを意圖していなかつた作品群、といえるわけである。

ならば、杜牧か意圖して遺した詩とは、意圖して詠した「邊塞」とは、如何なるものなのか。以下に、その具體的な手かかりとして、吐蕃に占領された西域の地を表す「河湟」という語に即して検討してみたい。「河湟」こそは、正に杜牧か意圖して詠し、意圖して遺した「邊塞」と目されるからである。

四、杜牧の河湟を詠じる詩

河湟とは、「新唐書」卷二二六下・吐蕃傳に「湟水出蒙谷、抵龍泉與河合。世舉謂西戎地曰河湟」(湟水は蒙谷より出て、龍泉に抵りて河と合す。世は擧げて西戎の地を謂いて河湟と曰う)とあるのに據れば、青海^{チベット}海近くに源流のある湟水か、黄河と交わる邊りの稱である。但し實際には、安史の亂(七五五―七六三)を機に吐蕃に占領された、黄河と湟水とか流れる河西・隴右節度使一帯(甘肅省より青海省東部一帯)を廣く指したようである。

肅宗至德二載(七五七)十月、吐蕃は西平郡(青海省西寧市)を占

領したのを皮切りに、徳宗建中二年(七八一)までに河湟一帯を全て占領するに至った。それは懿宗咸通二年(八六一)に歸義軍節度使張義潮が涼州を奪回し終えるまで、實に約百年の長きに亘るのである。

ここで特に興味深いことがある。「全唐詩」においてこの「河湟」の語を詩題或いは詩中に詠み込んだ詩は、杜牧か七首を數え、これは唐代詩人の中で最も多いのである。無論、河湟を「河隴」など他の語で表したり、または地名を表さずして彼の地を詠じる詩は、牧擧に暇の無いほどではある。しかしながら、杜牧か「河湟」を詩中に多く詠み込んでいたという事實は、いかに彼の地に深く關心を寄せていたかという表れてあろう。

次に掲げる「河湟」(卷二)には、杜牧か河湟をとのよう捉えていたかか、端的に表わされている。すなわち河湟は、「奪回されぬままの地」として、批判と嘆きのうちに綴られているのである。

- | | |
|---------|----------------------|
| 元載相公曾借箸 | 元載相公曾て箸を借り |
| 憲宗皇帝亦留神 | 憲宗皇帝亦た神を留む |
| 旋見衣冠就東市 | 旋ち見る衣冠の東市に就くを |
| 忽遣弓劍不西巡 | 忽ち弓劍を遺して西巡せず |
| 牧羊驅馬雖戎服 | 牧羊驅馬戎服と雖も |
| 白髮丹心盡漢臣 | 白髮丹心盡く漢臣なり |
| 唯有涼州歌舞曲 | 唯た涼州歌舞の曲のみ |
| 流傳天下樂閑人 | 天下に流傳して閑人を樂しましむる有るのみ |
- (河湟の地は、宰相の元載か嘗てその奪回を畫策し、憲宗もまた常に留意する所だった。しかしすぐに元載か處刑されるのを見ることになり、すぐに憲宗か崩御して、西方へ遠征することはなかつた)

たのだ。河湟に住む漢民族は、羊と馬を放牧しながら胡服を着せられていたけれど、蘇武のように白髪になっても忠誠心を懐き続ける唐の臣下なのだ。ところかそれをよそに、かの地より傳來した「涼州」曲か天下に廣く傳わって、安穩とした人々を楽しませているだけとは。

前半第一句と三句、第二句と四句か隔句對。第一・三句の元載（？七七七）は、代宗朝の宰相である。「借箸」とは畫策することを用う。代宗大曆八年（七七三）、吐蕃の邈寧侵攻の際、元載は西州刺史〔新疆自治區吐魯番附近〕赴任の經驗に基づいて、討伐の策略を奉じた。そこで朝廷は攻撃の準備を整えたものの、誹謗を受けたために攻撃を中止したのであった。

第三句の「東市」は、『漢書』卷四十九龍鍾傳に「鍾衣朝衣斬東市」（鍾は朝衣を衣て東の市に斬らる）とあるのを踏まえる。後に元載は、その恣意な振舞いによって自害させられた。

第二句は、憲宗が常に領土の圖を見渡しては、河湟を吐蕃から奪回したいと盛んに願っていたものの、その餘裕がなかったことをいう。第四句の「遺弓劍」は、帝王の逝去を意味する婉曲表現であり、詩中では憲宗が逝去したことをいう。

頸聯は、李陵と蘇武の故事を踏まえている。「戎服」とは、『漢書』卷五十四李陵傳に、將軍霍光と上官桀とか李陵を匈奴から召還しようとし、使いを送って打診したところ、「陵墨不應、執視而自觸其髮、答曰『吾已胡服矣』」（陵墨して應えず、執視して自ら其の髮を觸て、答えて曰く『吾は已に胡服たり』）とある。また「白髮」の語については、同蘇武傳に「武留匈奴凡十九載、始以羸壯出、及還、須髮盡

杜牧の邊塞を詠する時について

白」（武の匈奴に留むること凡そ十九載、始めは羸壯たるを以て出づるも、還るに及ぶや、須髮盡く白む）と記す。

尾聯の「涼州歌舞曲」とは、玄宗の開元年間涼州府の都督か彼の地の歌謠として朝廷に献上した曲である。

一首全體は、前半四句と後半四句の二部から構成されている。前半は、河湟の歴史的な経緯について典故を用いて説明する、説理的な部分である。それに對して後半では、河湟に住む漢人の心中と、肝心の唐王朝の富貴な人々の心中との乖離という、情緒を主として詠している。詩の末尾では批判と嘆息とを訴えているか、前半四句かインパクトを持つ故に、句末に流れる情緒のみに止まらぬ邊塞詩となっている。

會昌五年（八四五）二月、朝廷は、吐蕃の衰弱を機に河湟を奪回しようとして、觀察官を派遣した。『資治通鑑』卷二四七武宗會昌四年二月の條に「朝廷以回鶻衰微、吐蕃内亂、議復河・湟四鎮十八州。乃以給事中劉晏爲巡邊使、使之先備器械糧糗及訶吐蕃守兵衆寡」（朝廷は回鶻の衰微し、吐蕃の内亂せるを以て、河・湟四鎮十八州を復せんことを議す。乃ち給事中劉晏を以て巡邊使と爲し、之をして先に器械糧糗を備え、及び吐蕃の守兵の衆寡を訶らしむ）とある。杜牧はそれに深い感慨があり、武宗の徳を稱えて七言古詩「皇風」（卷一）を詠した。

仁聖天子神且武	仁聖天子神にして且つ武たり
内興文教外披攘	内に文教を興して 外に披攘す
以德化人漢文帝	徳を以て人を化す 漢の文帝
側身修道周宣王	身を側だてて道を修む 周の宣王
沈躩巢穴盡空塞	沈躩巢穴 盡く空塞し
禮樂刑政皆弛張	禮樂刑政 皆な弛張す

何當提筆待巡狩 何か當に筆を提して巡狩を待ち
前驅白旛弔河湟 白旛に前驅して河湟を弔うへき

※原注に「音は剛」と記す

(仁)聖天子たる武宗は、嚴かてかつ勇ましく、國內では禮樂によつて人民を感化し、國外では領土を廣げる。それはまるで、徳によつて人民を感化する漢の文帝のようであり、身を慎んで道を修めた周の宣王のようだ。獸の足跡のある道から隠れ家まで残らず塞ぎ、饑饉、音樂、刑法、政令は、全て寛容と嚴重とをもつて行われている。ああ、何時になったら私は筆を持って天子の巡狩を待ち、天子の前を驅けて白い吹流しをたなびかせ、河湟の遺民への弔いをしに行けるのだろうか。

第一句の「仁聖天子」とは、會昌二年四月、武宗に「仁聖文武至神大孝皇帝」の尊號が献上されたことによる。第三句の「漢文帝」とは、「漢書」卷四文帝紀贊に「專務以德化民」(専ら徳を以て民を化すに務む)とあり、第四句の「周宣王」は、「毛詩」大雅・雲漢序に「宣王承厲王之烈、内有撥亂之志。遇災而懼、側身修行、欲銷去之」(宣王は厲王の烈を受け、内に撥亂の志有り。災いに遭いて懼れ、身を削だてて行を修め、之を銷し去らんと欲す)とある。第五句の「述」は「歌述」(「説文解字」述部)の意味。

この詩の主題は、武宗の徳の謳歌であるか、そのみに止まらず、尾聯で「武宗の先拂いとなって河湟の地を奪回しに行きたいもの」と自身の壮志を力強く詠い上げ、颯爽とした餘韻を残している。

ここで、河湟の奪回という點で句が結ばれていることに着目したい。武宗が河湟を奪回できるか否かというところに、作者杜牧の意識が覆か

れており、またそれに借りて、果たすへき河湟奪回という杜牧の宿願か、直截に述べられている。いかに深い宿願であったかか窺われよう。

嘗て突厥討伐の手柄を立てた將軍史憲忠を詠する詩「史將軍」二首其二(卷一)においても、やはり河湟は「奪回すへき領土」として詠まれている。

(前四句略)

河湟非内地 河湟は内地に非ず

安史有遺塵 安史は遺塵有り

何日武臺坐 何れの日か武臺に坐して

兵符授虎臣 兵符 虎臣に授けられん

(河湟はわか王朝の領土ではないし、國內でも安史の亂以後、藩鎮の叛亂という火種が残っている。何時になったら、漢の武帝か匈奴討伐の軍を送り出したという武臺に坐して、天子の討伐の命を記した割り符か、勇猛なあなたに授けられることだろう。)

宣宗大中三年(八四九)二月、吐蕃が投降し、とうとう河湟の一部(秦州等三州及び七關)が返還されることとなった。杜牧は前年の大中二年より司勳員外郎兼史館修撰として朝廷勤務にあり、河湟奪回の喜びを國家の中樞にて體驗し得たのであった。

この際に杜牧は、宰相白敏中等の、宣宗への奉贈詩に奉和して「奉和白相公聖德和平、致茲休運、歲終功就、合詠盛明、呈上三相公長句四韻」(白相公の聖德和平、茲の休運を致し、歲終りて功就り、合わせて盛明を詠するに奉和して、三相公に呈上す長句四韻)(卷二)を詠した。

行看曠破好年光
萬壽南山對未央
駘戛可汗脩職貢
文思天子復河湟
應須日御西巡狩
不假星弧北射狼
吉甫裁詩歌盛業
一篇江漢美宣王

行くゆく看んとす 曠破れ年光好ろしきを
萬壽南山 未央に對す
駘戛可汗 職貢を脩め
文思天子 河湟を復す
應に須らく 日御西のかた巡狩すへし
星弧 北のかた狼を射るを假りす
吉甫 詩を裁して盛業を歌い
一篇の江漢 宣王を美む

また同年八月、河湟の住民、たった漢人千餘人か宮城を訪れた。宣宗は延喜門の樓にて彼らを慰撫し、彼らは歡喜に沸いた。「資治通鑑」卷二四八宣宗大中三年の條に「八月乙酉、河・隴老幼千餘人詣闕。己丑、上御延喜門樓見之、歡呼舞躍、解胡服、鑿冠帶、觀者皆呼萬歲」(八月乙酉、河・隴の老幼千餘人闕に詣つ。己丑、上は延喜門の樓に御して之を見るに、歡呼舞躍し、胡服を解き、冠帶を鑿いて、觀者は皆な萬歲を呼ぶ)と記す。その様子を目にした杜牧は「今皇帝陛下(今皇帝陛下)一たび徵兵を詔してより、日ならずして功業い、河湟の諸郡、次第に歸降す、臣は聖功を觀るを獲て、輒ち歌詠を獻す」(卷二)を宣宗へ奉贈する。この詩は、現存する作品中で唯一、杜牧か皇帝へ奉贈した詩である。杜牧か時に繰り返し詠した河湟の奪回かとうとう果たされたわけであり、その強い關心と喜びゆえに奉贈に至ったのであろう。

捷書皆應畫謀期 捷書 皆な畫謀の期に應じ

杜牧の邊塞を詠する時について

十萬曾無一線遺 十萬 曾ち一線の遺す無し
漢武懸誇朔方地 漢武 朔方の地を誇るを懸ち
宣王休道太原師 宣王 太原の師を道うを休む
威加塞外寒來早 威は 塞外に加わりて寒の來たること早く
恩入河源凍合遲 恩は 河源に入りて凍の合すること遅し
聽取滿城歌舞曲 聽取せん 滿城歌舞の曲
涼州鬢鬢喜參差 涼州の鬢鬢 喜ふこと參差たり

更に、この頃(8)に江西觀察使に赴任した、姉の夫の妻(裴延翰の父)へ贈る「中丞業深鞘略、志在功名、再奉長句一篇、兼有賂勸」(中丞業は鞘略を深くし、志は功名に在り、再び長句一篇を奉じ、兼ねて賂勸する有り)「外集」では、詩の末尾で次のように詠している。

要君嚴重疎歡樂 君に要む 嚴重にして歡樂を疎んせよ
猶有河湟可下鞭 猶お有り 河湟の鞭を下すべきこと
(中丞殿よ、どうぞ自重して下さい。河湟の地は一部を取り戻したとはいえ、また鞭を降ろすように厳しく見張らないと、残る土地か、どうなるか分かりませんから。)

以上に擧げた詩において、河湟とは、全て「奪回すへき邊塞地」という一定の方向のもとに詠しられていることが判る。

「河湟」詩では、彼の地か、才略ある宰相によっても中興の主たる憲宗によっても奪回できぬまま現在に至る場所として描かれている。「皇風」詩では、自身か先驅けとなつても河湟を奪回したいという壮志を述べ、武宗に河湟奪回を實現することを期待している。そして杜牧の念願であつた河湟の奪回かようやく果たされた際には、

杜牧は恐らくは生涯でたた一度、皇帝への奉詠詩を詠して、その喜びを表現した。と同時にまた、殘る領土の奪回にも強く關心を抱いていた。このように、杜牧における河湟とは、現實的政策の對象として詠じられ、常にその奪回に關心を寄せ續けた場所であつたことか理解されよう。

五、杜牧における邊塞—河湟—

以上までに見てきた杜牧の「河湟」を詠する詩から、改めて杜牧か邊塞という題材に向き合う際の表現姿勢、描寫傾向を検討したい。杜牧か遺すことを意識した「邊塞詩」とは如何なるものであり、それは意識しなかつた「外集」・「別集」所收の詩と較べて如何に異なるのか。更にそこから、杜牧の如何なる詩歌觀や詩人としての個性を確認するのたろうか。

(1) 同時代詩人の邊塞詩

ここで、杜牧と同時代の詩人である、顧況の子・顧非熊(約七九七—?)の七言律詩「出塞即事」二首其の二(『全唐詩』卷五〇九)を例に取り、比較を交えることにしたい。その詩中には杜牧作品との相違点が見いたされ、杜牧か「邊塞」という題材に向き合う態度を相對的に把握するのに適するからである。

賀蘭山便是戎疆 賀蘭山は便ち是れ戎疆
此去蕭關路幾荒 此より蕭關を去れば路荒るるに幾し
無限城池非漢界 無限の城池は漢界に非ず
幾多人物在胡鄉 幾多の人物 胡郷に在るや

諸侯持節望吾土 諸侯 節を持ちて吾か土を望み
男子生身負我唐 男子 生身 我か唐を負う
迴望風光成異域 迴望す 風光 異域と成るを
誰能獻計復河湟 誰か能く計を獻して河湟を復せん
(あの賀蘭山(寧夏ウイグル自治區銀川付近)靈武節度使の管轄區と、吐蕃の占領する一帶との境)か吐蕃の地との境界で、ここから蕭關(甘肅省固原。昔の四關の一)を抜けると、道は荒原としてくる。無限に續く城壁とそれを取り巻く濠とは、我が唐王朝の領土ではなく、どれ程の漢人がこの地にいることか。諸侯は出征か命ぜられた割り符を持って嘗ての領土を眺め、若者は自身の體て唐王朝を一身に背負う。遙かに眺める、吐蕃の地となつたその景色を。一體誰か優れた策略を献上して、河湟の地を奪回できるのたろうか。)

(2) 「河湟」の語が持つイメージ

「出塞即事」の舞臺は、出征兵士の目を通して描かれるいわは想像上の邊塞世界であり、詩中の「河湟」は、兵士の目の前に廣がる廣大な邊塞の地を象徴する語である。第二節(2)に前述した通り、杜牧にも、このような顧非熊の詩と同様に、傳統的手法を用いて想像の邊塞を描く詩は存在する。但しその一連の詩は、杜牧か關して一度は捨てた作品を収める『外集』・『別集』に偏在していた。

翻つて『樊川文集』に収める「河湟」を詠した詩はといへば、「河湟」詩以外の詩において、詩中には邊塞のイメージを喚起する胡笳や烽火、ひいては兵士の姿か詠み込まれていない。河湟は想像上の空間ではなく、奪回されねばならぬ領土の一部、という、ひたすらに現實

的政策的対象として言及されている。

すなわち、杜牧の邊塞を詠する詩を總體的にみると、『樊川文集』においては詩中に「河遠」の語を詠み込み、邊塞を現實的に描く。一方、『外集』と『別集』においては「河遠」の語を含まず、邊塞を想像の世界として描く。兩者には、そのような截然たる差異が認められるのである。

この兩者の差異を生じる要因は、①詩の構造（外的要因）と、②杜牧の詩作における志向（内的要因）との二點に在ると思われる。

①詩の構造については、『樊川文集』所收の詩は、河遠奪回の際などの具體的な時宜、または特定の相手へ詩を贈るといった個別的な場面に即しており、その詩中に河遠を素材（部分的・個別的なもの）として詠み込む、という構造を持っている。他方の『外集』と『別集』所收詩においては、邊塞それ自體を主題（全體的・統一的なもの）として用いている。

無論、『樊川文集』所收詩にも、邊塞自體を主題とする詩が存在する。第四節に挙げた「河遠」詩がそれである。但しそこに描かれる邊塞は、完全な想像の世界とは少しく異なっているといえよう。つまり、河遠の歴史的経緯か詩の半分を占めるために、詠史詩に似て議論めいた風格を備え、顧非熊の詩の如く邊塞の空間を描くいわゆる「邊塞詩」の系統には収まりきれないように感ぜられるのである。

②詩作における志向は、樂府系邊塞詩の寫作という點が鍵となる。第二節に述べた通り、杜牧は同時代詩人の中でもとりわけ樂府系邊塞詩を制作しなかった。すなわち杜牧は、樂府題を用いるか否かに拘わらず、樂府系邊塞詩を持つ「イメーン」上の邊塞」という描き方自體を良しとせず、故にその傳統的手法に即した邊塞詩を、制作はしても遠

杜牧の邊塞を詠する詩について

すことは意圖しなかった、と思われる。そうして一度は捨てた作品か、後に結果として『外集』、『別集』に収録されたのであろう。

(3) 視點の所在

松浦友久「樂府・新樂府・歌行論―表現機能の具同を中心に―」⁸⁾は、古樂府の表現機能に「視點の三人稱化、場面の客體化」という點かあると論じ、その意味を「古樂府系の作品では、一般に、作者の一人稱的な個別的視線は捨棄され、共有化された第三人稱的な視點から一首全體が描寫される。そして、そのことによつて、作品中の場面は、作者個人の主體的な體驗の場としてでなく、いわば舞臺上の場面のようになり、客體化されて提示されるのか普通である。」と述べている。この「視點の所在」という觀點に基づき、兩者の詩を捉え直してみたい。

顧非熊の詩は古樂府ではないか、その構造及び内容上の性質は、古樂府系邊塞詩の傳統的なものと見えよう。一詩全體は、作中人物である兵士の視點に貫かれ、兵士の心情を吐露する。句末二句に詠しられる嘆きと批判とは、兵士のみでなく更に主體を特定しない感情にまで擴がり、いわば讀み手とその感情を共有する。従つて顧非熊の詩は、「三人稱」の視點から「客體化」された世界を詠している、といえる。それに對して杜牧の「河遠」詩は、「出塞即事」と同様に邊塞を主題としながらも、その構造はやや異なる。詩中には作中人物が存在せず、作者杜牧の「一人稱的」な視點を通して描かれている。その他の、河遠を素材として詠する詩においても、個別的、具體的な場面に即して詠するゆえに、杜牧の視點から描かれているといえよう。

總して杜牧詩における河遠は、その内側の世界から描くのではなく相對化されて、杜牧か杜牧の視點から、それも杜牧の心情を反映した

經世家の觀點に徹して描かれているのである。

(4) 中晩唐という時代の中で

董乃斌「論中晩唐の邊塞詩」^①は、中晩唐期の邊塞詩の特徴について次のように論じている。まず、その思想内容については、

由反映外患而深刻觸及內憂、從而尖銳地抨擊朝廷政治、對昏庸腐朽的統治者施以當頭棒喝、這乃是中晩唐邊塞詩在思想內容上最根本的特點。

(外患を反映し、深く内憂に言及することによって、朝廷の政治を鋭く論難し、愚昧で腐敗した統治者に對しては愈しく猛省を促すという、これこそ中晩唐邊塞詩の思想内容における最も根本的な特徴である)

として、そこに「政治批判」の觀點があることを指摘する。

更にまた、愛國心の強い詩人の詩として、杜牧「河遠」と「早雁」(卷三)、及びその他の詩人の詩(賈島「代邊將」、雍陶「塞路初晴」等)を例に掲げ、

他們在詩中還常常表現出不惜以身許國、爲王前驅的可貴熱情、一旦這種熱情遭到冷遇、則又化爲滿腔憂憤傾瀉出來。一方面、這些詩議論剖析、陳詞獻策的成份加重了、詩人們從各個角度、特別是就最高統治者的方針大計提了許多意見、使得邊塞詩明顯地加強了說理性。另一方面、由於邊疆現狀的危困、問題的棘手、前途的可憂、這些詩在一般邊塞詩通常的激揚昂奮之中又透出淒涼、悲哀乃至肅殺之氣。

(彼らは詩中で常に身を以て國に捧げ、君主のために先驅けとなるといふ貴おべき情熱を常に表現し、一度この手の情熱が冷遇さ

れる目に遭うと、滿腔の憂いや憤りをふつけるのである。：一方では、これらの詩には議論と分析、進言と對策の獻上という要素が強まり、詩人達はそれぞれ角度から、特に最高統治者の方針・計畫に對して多くの意見を呈した、この事によって邊塞詩は明らかに說理性を強めたのであった。また一方では、邊塞の現狀の危機と問題の厄介さ、前途の憂いに因り、これらの詩は、普通の邊塞詩ならば通常昂揚していたのに對して、もの悲しく、痛ましく、ひいては寂寥とした雰圍氣を呈している。)

と述べる。まとめると、彼らの詩は①國家に盡くさんとする情熱、②社會狀況の議論分析による說理性、③現狀を反映した悲哀の情感を帯びており、杜牧はその代表的な詩人——というわけである。

確かに以上までに掲げた杜牧の詩には、右の點が窺われよう。ここで更に一步を進めて、①と②の點は、杜牧詩文か本来特徴とする要素と關わりかあることに留意したい。

①の情熱は、杜牧の豪の詩風と相俟って、高らかに詠い上げられている。また②の、特に說理性という點に着目すると、それは杜牧の代表作とおほしき「赤壁」(卷四)、「題烏江亭」(卷四)といった詠史詩において、端的に表されるものである。正に「河遠」詩にも、詩の前半に詠史詩的な表現が含まれ、それかもたらず說理性が、後半部分の基調となる③の悲哀の情感とコントラストを成す効果を生んでいよう。異民族との戦争か多發する時代を承けて、杜牧の關心はより邊塞に向かいやすくなった。この關心のもとに杜牧は邊塞を詠じ、それは豪の詩風や說理性等と相俟って、個別的・具體的な詩へと結びついていったのであろう。

六、異民族討伐の論策と、序としての詩

杜牧において、異民族討伐への情熱とそれに關する表述とは、實際の政治行動と密接に連動していた。

安史の亂以來唐朝を脅かし續けた回鶻と吐蕃の兩民族は、武宗朝（會昌元年—六年（八四一—八四六））の頃に至ると、ともに内紛によつて衰退する。それを機に、武宗朝にて權勢を誇つた宰相李德裕は、その討伐に力を注いだ。

杜牧は、それ以前に勃發した政治事變「甘露の變」（文宗大和九年（八三三））後には、それまで精力的だった政策の獻上を止め、政治問題への關心を失つたかのようであつた。しかし武宗會昌二年（八四二）に中央勤務「比部員外郎兼史館修撰」から黃州刺史（湖北省新洲縣）へ赴任すると、杜牧は再び異民族討伐という時事問題に關して積極的な表現を始めたのである。杜牧にはこのように、社會狀況と政情との變化に對して敏感に對應する側面があつた。

次に掲げる黃州刺史在任期（會昌二年—四年（八四二—八四四））の長編古詩「郡齋獨酌」（卷一）には、異民族討伐を含めた經世家たる杜牧の理想か、力強くまた伸びやかに詠しられている。

（前の部分省略）

平生五色線 平生 五色線もて
願補舜衣裳 舜の衣裳を補はんことを願う
絃歌教燕趙 絃歌もて燕趙を教え
蘭芷浴河湟 蘭芷もて河湟を浴せしめん
腥膻一掃蕩 腥膻一に掃蕩し

杜牧の邊塞を詠する時について

兕狼皆披擯 兕狼 皆な披擯せん
生人但眠食 生人 但た眠食し

壽域富農桑 壽域 農桑を富ましめん
孤吟志在此 孤吟 志は此に在るも

自亦笑荒唐 自ら亦た荒唐なるを笑う

（常に天子を諫める文辭「五色線」を以て、その補佐をしたいと思つている。反亂する河北や河東の地を禮樂によつて教化し、吐蕃の占領する河湟の地を君子の徳で清めよう。侵入する外敵は皆な平らげ、反亂軍の藩鎮は全て潰滅したい。人民が専ら安心して生活し、天壽を全うできるような太平の世にして、農作を豊かにさせるのだ。そんな思いを一人詠じて志はここにあるのだか、これほどの壯大な願望には、自分でも荒唐無稽さをおかしく思う。）

また、「資治通鑑」卷二四六武宗會昌二年八月の條に「可汗帥衆過把頭烽南、突入大同川、驅掠河東雜虜牛馬數萬、詔發陳、等兵屯太原、俟來春驅逐回鶻」（可汗は衆を帥いて把頭烽の南に過ぎり、大同川に突入し、河東の雜虜牛馬數萬を驅掠す。陳、等の兵を發ちて太原に屯し、來春を俟ちて回鶻を驅逐するを詔す）とある。「郡齋獨酌」と同じく黃州刺史在任期の長編古詩「雪中書懷」（卷一）では、この回鶻侵略の事件に觸れて、回鶻討伐への思いを次のように詠じている。

（前の部分省略）

北虜擧亭障 北虜 亭障を壞し
聞屯千里師 千里の師を屯するを聞く
牽連久不解 牽連 久しく解かざれば

他盜恐勞類 他盜旁に窺わんことを恐る

臣實有長策 臣實に長策有り

彼可徐鞭答 彼 徐かに鞭答すへし

如蒙一召議 如し一たび召議を蒙らば

食肉寝其皮 肉を食らい其の皮に寝ねん

斯乃廟堂事 斯れ乃ち廟堂の事

爾微非爾知 爾微なれば爾の知るところに非ず

向來虜等語 向來 虜等の語は

長作陷身機 長く作る 陷身の機に

(回鶻が岩の番所を破壊し、朝廷は千里にも連なる程の大軍を駐屯させたという事を聞いた。その大軍が長らく守備を解かなければ、反亂する藩鎮が傍て隙を狙うことか心配た。私には優れた策略があり、回鶻をゆるやかに制壓できる。私か一度朝廷から議論に招かれたら、回鶻の肉を食へてその皮に寝ることになるだろう。しかしそれは朝廷の決める事。お前(杜牧自身)は卑しい身なのだから、お前のつかさどるところではない。昔から身分を超えた發言は、久しく身を陥れられる畏となってきたのだ。)

時中では「長策(優れた策略)」の献上を、身分違いの備越な行動だと謙遜するか、却ってこの口吻には杜牧の自信が窺われよう。事實、この「長策」は、後に具體的な策略として献上されたのである。會昌四年九月、杜牧は黃州刺史から池州刺史(安徽省貴池市)に轉任し、そこで回鶻討伐の策略「上李太尉論北邊事啓」(卷十六)を李德裕に献上した。この策略こそは、「雪中書懷」に述べる「長策」に該當しよう。

但しその策略の具體的な内容は、杜牧独自の發想によるものではない。「魏書」卷三十五崔浩傳にみえる、崔浩が蠕蠕を討伐する際の策略を、ほぼ踏襲したものである。杜牧は黃州にて、その地への赴任を李德裕による左遷と見なして不満を懷く一方で、古典研究に勵む等の前向きな心境も持った。従って、黃州滞在期に歴史書から着想を得たのであろう。しかし杜牧はその「長策」を黃州任官期には奉しなかつた。恐らく、以下に述べるような時宜を考慮したのではなからうか。

遼の會昌三年春、異民族の騷動とは別に、昭義節度使(山西省長治市)にて劉稹の叛亂が勃發した。杜牧は同年七月頃に、その策略を論ずる「上李司徒相公論用兵書」(卷十一)を李德裕に奉した。「資治通鑑」會昌三年の條に「時德裕制置澤潞、亦頗采牧言」(時に德裕澤潞を制置し、亦た頗る牧の言を采る)と記すのに據れば、李德裕は杜牧の策略を稱揚したようである。

そうして叛亂か翌會昌四年八月に平定されると、杜牧は同し月の内に李德裕へ「賀中書門下平澤潞啓」(卷十六)を奉じて祝辭を述べた。その直後、杜牧は黃州刺史から他州刺史に轉出する。そこで着任後、恐らくそう月日の經たない内に、今度は回鶻を一掃すべく、「上李太尉論北邊事啓」を李德裕に献上したのである。

書中で杜牧は、「古來より王朝か西域民族を攻撃するのは秋冬の季節であり、それか西域民族にとって有利な時期であるため、王朝側は敗戦していた」という崔浩の發言を踏まえ、回鶻の意表をついて來年の夏にこそ討伐すへきた、と説いている。杜牧は、昭義の叛亂平定の氣運をそのまま回鶻討伐へ向けることを避けて、周到な準備を來夏までに積んでこそ、回鶻討伐を果たせるのではないかと期待したのである。杜牧はそれだけ眞剣に回鶻討伐を望み、また李德裕の政策への期

待から、時期を鑑みつつ建言したのだった。

このように、「長策」に言及する詩を著した後に、連動する形でその「長策」を實際に献上したことから言えば、「雪中書懷」詩は結果的に策略の「序」に相當しよう。杜牧において、詩作と實際の政治行動との両者が連動していることを示す、顯著な例だと言える。

河湟を詠じた時についても、このような連動した關係を踏まえると、より理解しやすくなるだろう。つまり、同時期に騷擾の地であった河湟も、回鶻の詩と同じ意識のもとに、具體的、個別的な場面に即して詠じられていたのである。

なお杜牧のこの回鶻討伐に關する策略も、『舊唐書』卷一四七杜牧傳に「李德裕之を稱う」と記すのに據れば、李德裕に高く評價されたようである。そして更に李德裕は、杜牧の策略と前後する九月末に「輪回鶻事宜狀」(『李文饒文集』卷十七)を献上して回鶻討伐を願い出した。但し評價されたはずの杜牧の策略が正式に用いられることはなく、杜牧は結局報われぬままであった。

七、結語

平生より軍略家としての自負を抱いていた杜牧は、その當時、異民族問題の對象となっていた邊塞に對しても、大いに關心を寄せていた。そしてその邊塞を、主題、または素材として、詩文に詠み込んだ。但し杜牧は、邊塞詩において際立った作品を残す「邊塞詩人」に當てはまらないために、杜牧が詠じた「邊塞」は、これまで十分に注目を受けてこなかった。

しかし、改めてその邊塞を詠じた作品群を見直し、杜牧の「邊塞」という題材(主題・素材)に向き合う際の描寫傾向、その表現態度に

杜牧の邊塞を詠する詩について

ついて検討してみると、そこからは様々な事實が浮かび上がって來るのである。

まず杜牧の「邊塞」を詠する詩には、杜牧の個性が反映された詩といわゆる漢魏六朝以來の傳統的手法を用いた邊塞詩とが併存し、それは杜牧自身の手によって截然と分けられていた。

このことは、杜牧作品集の編纂状況が重要な鍵となる。すなわち、杜牧の個性が反映された詩は、自身の知友を求めへく後世に傳える作品を集めた『樊川文集』に收められていた。他方の傳統的手法を用いた邊塞詩群は、『外集』、『別集』に偏在して收録されている。この二集に收める詩は、杜牧が一度は除外した作品群である。とすれば、そこに偏在する邊塞詩とは、杜牧が遺すことを願わなかった作品群と理解されよう。この除外は、杜牧が樂府系邊塞詩の特徴たる「イメージ」された邊塞を描くことを重んじぬ故に促された、と考えられる。このような杜牧の詩作における志向と、それにまつわる思いは、邊塞を詠じた作品に着目してこそ、願うかに浮かび上かるのである。それは「飲酒」「閑適」等といった他の題材からは、これ程まで明確には見いだされないうらう。

また、一般に邊塞詩は、關中の女性が出征夫を案ずる閨怨詩的要素が強い。そうした邊塞詩が『樊川文集』に見えないこと、及び『樊川文集』『外集』、『別集』中に、戰鬪の慘狀を描く詩が無いということ——この二點は、杜牧が主戰派たる事を傍證しよう。

では、杜牧が遺すべく選定した詩において、「邊塞」は如何に詠まれているのか。

杜牧が多用了吐蕃占領の地「河湟」という語を手かりに検討すると、それは、①杜牧が杜牧自身の觀點から、②具體的かつ個別的な

場面に即して描かれ、④異民族討伐の策略と連動する發想を持つ——という特色を有していた。「河産」とは、軍略家を自負する杜牧にとつて常に關心の所在であり、詩文においても、奪回すべき政策の對象としてのみ詠じられていたのであった。

杜牧における「邊塞」とは、「懷古」「飲酒」「閑適」等と比べてみても劣らぬ、特別な意義を持つ題材である。すなわちそれは、杜牧の詩歌観や詩人としての個性を明瞭に映し出す、その判斷基準としての意義を有しているのである。

注

(1) 杜牧の卒年に關しては諸説あり、未だに一定していない。ここでは、植木久行「杜牧生卒年論考」許渾らの没年にも觸れて「『集刊東洋學』68號、一九九二年十一月」に従う。

(2) 本稿で「杜牧の作品集」と記す場合、底本とする『樊川文集』所收の『樊川文集』、『樊川外集』、『樊川別集』を指す。馮集梧『樊川詩集注』所收の「樊川詩補遺」(『唐音戊籤』等からの補録)と「樊川集遺收詩補録」(『全唐詩』からの補録)は、該書作品が有る際のみ言及する。

(3) 王昌猷・周小立「試論中唐邊塞詩」(『唐代邊塞詩研究論文選粹』甘肅教育出版社、一九八八年五月所收)は、盛唐期邊塞詩は七言歌行か典型的的類型であったのか中唐に到ると短くなり、樂府の舊題を用いる近體詩が大多數を占め、短編の五言古詩もより増加したと述べる。

(4) 尹占華校注「張籍詩集校注」(甘肅文化出版社、一九九七年一月)所收「張籍繫年考」、及び前掲注1植木論文に據る。

(5) 前掲注1植木論文に據る。

(6) 但し詩の第三・四句か、白居易「失籍」(『白氏長慶集』卷二十三)の第五・六句目と一字を除き重複する。佟培基編「全唐詩重出誤收考」

(7) 陝西人民教育出版社、一九九六年八月)參照。
原文は次の通りである。「官爲駿馬監、職帥羽林兒。兩綬不見、落花何處期。羅帳白玉鏡、怒袖紫金籠。田實長留醉、蘇辛曲盡岐。豪持出塞節、笑別遼山眉。捷報雲臺賀、公卿拜壽儀」(官は駿馬の監と爲り、職は羽林兒を帥ゆ。兩綬 職して見わざ、落花 何處にか期さん。羅して敵く 白玉の鏡、怒りて袖す 紫金の籠。田・實 長く酔いを留め、蘇・辛 曲けて岐を驢る。豪として持つ 出塞の節、笑いて別る 遼山の眉に。捷報 雲臺に賀し、公卿 壽眉を拜さん)。

(8) 胡可先「杜牧詩集考」(『杜牧研究叢稿』人民文學出版社、一九九三年九月所收)及び羅時達「(丁卯集)與(樊川集)等各本重出互見詩考辨」(『晚唐詩歌格局中的許渾創作論』太白文藝出版社、一九九八年八月所收)に據り、許渾作品集に重出或いは他詩人の作と疑われる詩は省略する。「外集」・「別集」詩の詩型は「唐音戊籤」卷一杜牧の條に據る。本稿の底本と「唐音戊籤」本文との間に字の異同は見えない。

尙お①「并州道中」、②「偶題」二首、③「邊上聞胡笳」三首、④「邊上晚秋」、⑤「邊塞」、⑥「青塚」、⑦「秋夢」について、杜牧には邊塞へ到った行跡がないため、他人の詩ではないかとする意見がある。羅敏「杜牧詩選」(人民文學出版社、一九五七年七月)前言では①③④⑥、郭文精「(樊川外集)詩辨偽」(『唐都學刊』一九八七年第二期)は②、吳在慶「杜牧集詩考辨」(『杜牧論稿』廈門大學出版社、一九九一年三月所收)は③④⑤を疑問とする。また李立朴「許渾詩考辨」(『許渾研究』貴州人民出版社、一九九四年十二月所收)では②⑥を除く時、羅時達同書「許渾詩補遺」では②を除く全詩を許渾詩と推測する。しかしいずれも他詩人の作品集に重出しておらず、背景以外の邊塞詩を否定するのは説得的とは言えないので、ここでは杜牧作品として扱う。

(9) 杜牧詩文の豪と艶については、愛甲弘志「杜牧の詩と散文——その兩者を支える創作基礎——」(『文學研究』80輯、一九八三年二月)等を參

照。

(10) 『答莊充書』(卷十三)にも、司馬遷の言を踏まえて「古者其身不遇於世、寄志於言、求言過於後世也。自爾漢已來、言貴者千百、自今觀之、聲勢光明、孰若馬遷、相如、賈誼、劉向、揚雄之徒」(古の者は其の身世に遇わざれば、志を言に寄せ、言の後世に遇うを求むるなり。爾漢自り已來、言貴たる者千百なるも、今自り之を觀るに、聲勢の光明なるは、馬遷、相如、賈誼、劉向、揚雄の徒に孰若れせ)と述べる。

(11) 胡可先「杜牧詩文雜考」(前掲注8書所收)に、裴延翰の叔父・裴休の中書侍郎任官期(宣宗大中九年(八五五)二月(十年(八五〇)十月)と指摘する。更に序から、四年前の冬に杜牧が病を得た事か分かり、逆算して大中十年と考えられる。

なお南宋・劉克莊撰『後村詩話』卷一に「樊川有續別集三卷、十之八九皆禪詩」とあり、南宋の頃『續別集』三卷が存在した。葛兆光『唐集瑣記』(『文獻』第二十二輯、一九八四年所收)は、『全唐詩』卷五二六にその殘部が收録されていると述べる。

(12) 前掲注11胡可先論文では、咸通十一年(八七〇)の皮日休「傷殿子重詩序」(『全唐詩』卷六一四)に記す「餘爲童在鄉校時、隨上抄社舍人牧之集、見有與進士嚴憚特」の「與進士嚴憚特」を「外集」所收「和嚴憚秀才落花」詩と指摘し、それ故に「外集」か八七〇年以前に編纂されたと推測する。また、現存の「外集」は、皮日休の見た「外集」と「兼外詩」(『別集』序)等を混合して編まれたと述べる。

(13) 但しこの「外集」と「別集」には、その經緯ゆえ、他詩人、とりわけ許渾の時が多く混入した。姚寬撰『西溪叢語』卷上に「世傳『樊川別集』爲杜牧之詩、乃許渾詩。渾有『丁卯集』烏絲欄上本者。唐彦猷家有數十首、皆『樊川外集』時也」(世に傳うる『樊川別集』の杜牧の時と異すは、乃ち許渾の時なり。渾に『丁卯集』か烏絲欄上本なる者有り。唐彦猷の家に數十首有り、皆な『樊川外集』の時なり)と記す。

杜牧の邊塞を詠する時について

(14) 河湟という稱の狹義、廣義については、蘇曼卿「唐宣宗收復河湟地區與三州七關的年代略論」(『唐代研究論集第一輯』新文豐出版公司、一九九二年所收)を参照。

(15) 『新唐書』卷二六下吐蕃傳及び、スタイン文書六三四二號に據る。

(16) 『新唐書』卷一四五元龜傳に、「賊嘗在西州、具知河西・隴右要領。乃言于帝曰：而田神功短其職、帝由是疑不決」(賊は皆て西州に在り、具に河西・隴右の要領を知る。乃ち帝に言いて曰く：而るに田神功は其の職を短短し・帝は是に由りて疑いて決せず)とある。

(17) 『新唐書』同傳に「大曆十二年三月、下詔賜賊自盡」とある。

(18) 『新唐書』卷二六下吐蕃傳に「憲宗常覽天下圖、見河湟舊封、赫然思經略之、未暇也」(憲宗常に天下の圖を覽るに、河湟の舊封を見て、赫然として之を經略せんと思ふも、未だ暇あらざるなり)とある。

(19) 繆鉞「杜牧年譜」(人民文學出版社、一九八〇年九月)會昌四年の條参照。但し引用される『資治通鑑』の記事が基づく李德裕「巡邊使劉潼狀」(『李文饒文集』卷十七)には、自注に「會昌五年二月二十三日」とあり、岑仲勉「李德裕『會昌伐叛集』編證上」(『岑仲勉史學論文集』中華書局、一九九〇年七月)でも會昌五年二月と編年されるのに從う。

(20) 吳汝煜・胡可先撰『全唐詩人名考』(江蘇教育出版社、一九九〇年八月)杜牧の項に從う。

(21) 『新唐書』宣宗紀に「大中三年二月、吐蕃以兼・歸于有司」とある。

『舊唐書』宣宗紀には「春正月」と記すが、『資治通鑑』卷二四八宣宗大中年では二月の條に記す。ここでは『新唐書』及び『資治通鑑』に據る。

(22) 白敏中の他の宰相は、馬植、崔絳、魏扶の三者である。但し新舊『唐書』宣宗紀及び『新唐書』宰相表に據ると、崔絳と魏扶は大中三年四月に宰相に就任するか、馬植は四月には宰相を辭任しており疑問が残る。

(23) 『舊唐書』宣宗紀には「七月」と記すか、ここでは薛逢の時題に「八

- 月初一駕幸延喜樓看冠帶降戎」(『全唐詩』卷五四八)と記すのに據る。
- (24) 自注に「時收河湟、且止三州六關」(時に河湟を收むるも、且く三州六關に止まるのみ)と記す。「樊川詩集注」は「止」を「立」に作る。「資治通鑑」大中三年の條には、七關のうち、六月に六關を奪回し、七月(舊唐書)宣宗紀では、六月の後日)に残る蕭關を奪回したとあるので、六關奪回後、蕭關奪回までの間に著わしたことになる。
- (25) 但し例外的に「外集」にも「河湟」の語が見える。第四節所掲「中丞葉深船略、志在功名、再奉長句一篇、兼有啓勸」である。この詩はおそらく裴延翰の手になく、流出していたところを「外集」に収録されたのではないか。というのも延翰の手にあれば、己の父と杜牧とを繋ぐよすがとして、この詩を『樊川文集』に收めたと思われるからである。とすれば「河湟」とは、やはり「別集」、「外集」所收詩には用いられない方向性にある語、と位置づけられよう。
- (26) 『中國詩歌原論—比較詩學の主題に即して—』(大修館書店、一九八六年四月)所收。但し新樂府における「觀點の三人稱化・場面の客體化」の機能は、「古樂府系統のような統一的な状態にはない」と述べる。
- (27) 前掲注3書所收。
- (28) 杜牧と「甘露の變」との關わりについては、抽論「杜牧「昔事文皇帝三十二韻」について—その制作意圖をめぐって—」(『中國文化—研究と教育—』第五九號、二〇〇一年六月)及び、「杜牧における「甘露の變」—李甘・李中敏との交流を通して—」(同誌第六〇號、二〇〇二年六月)を参照されたい。
- (29) 傅璣琮「李德裕年譜」(河北教育出版社、二〇〇一年十一月)四二九頁は、「上李太尉論北邊事啓」の文中に「今者 年數豐熟」と記すのに據り、秋冬の間に著わしたと指摘する。
- (30) 松尾幸忠「黃州時代の杜牧—「豊」なるものの内在化—」(『中國文學研究』第十五期、一九八九年)では、杜牧の黃州時代を「古典の研究と
- 經世への種種的な取り組み」と述べる。
- (31) 前掲注29傅璣琮書三七八頁は、「李司徒」の稱から、李德裕か司徒を拜する六月以後、かつ杜牧の戦路上から八月前として、七月頃の作と推測する。
- (32) 但し前掲注29傅璣琮書三七九頁では、實際は杜牧の上奏以前に李德裕の戦路が決まっていたとし、更に兩者の戦路に相違があることから、「資治通鑑」の記事を誇張した表現であると述べる。待考。
- (33) 李德裕はこの功績によって太尉を拜した(『新唐書』卷一八〇李德裕傳)。これは『新唐書』武宗紀によると「八月戊申」(二十八日)のことである。杜牧の題には「太尉」の稱かないが、次いで奉した「上李太尉論北邊事啓」では「太尉」と稱することに據り、李德裕の太尉拜命以前と見なす。
- (34) このように複雑な杜牧と李德裕との關係については、稿を改めて論じたい。